資料 1-2

展示施設を用いた飼育及び普及啓発について

公益社団法人日本動物園水族館協会　生物多様性委員会

1.　平飼い飼育（展示施設を活用）による飼育

(1) 飼育方法の検討

更なる飼育下繁殖技術の向上やキャパシティ確保に努めていくうえで、展示施設での飼育については、その有用性が昨年度から検討されてきた。動物園の展示施設は、非公開施設より広い飼育環境を用意することができる。そこで、より安定した飼育方法を構築したのちには、今後の野生復帰技術についても、重要な役割を持つと考えられる。そのためにも、展示施設での飼育を行いながら、以下のような行動を誘発するための環境作りを検討する。

＜想定される行動誘発＞

- ペアによる繁殖期の行動（営巣、交尾、産卵）
- 母鳥による抱卵・育雛行動

(2) ライチョウの生体展示による効果

① 生きたライチョウを展示することで、来園者のライチョウに対する興味および関心を効果的に喚起することが可能になる。

② ライチョウの飼育園だけでも 600 万人(スバールバルライチョウの飼育園を含めると 770 万人）の年間入園者数があり、多くの国民を対象としたライチョウの普及啓発が期待できる。

③ ライチョウ保護増殖事業における生息域内保全の取組と連携することで、より具体的でリアルタイムな情報提供が可能となる。

④ 他の展示動物種（ニホンカモシカやタンチョウなどの天然記念物、ツシマヤマネコやトキなどの国内希少野生動植物種）とも展示に関連をもたせることで、ライチョウのみならず、我が国の生物多様性の重要性を伝えることが可能になる。

(3) 展示公開時期

現在、域内保全活動や中央アルプスでのライチョウの半世紀ぶり発見についてのマスメディアによる報道や、ライチョウに関するクラウドファンディングなどを通じ、ライチョウ保全への関心が高まってきている。この状況のもとで、ライチョウを公開することでより一層の普及啓発の効果が上がることが考えられることからも、今年度内の公開を目指す。

2.　普及啓発の促進

JAZA の加盟園館のネットワークを活用し、ライチョウおよびスバールバルライチョウ飼育園館による連携した取り組み（スタンプラリーや連続講演会、巡回写真展など）や、加盟園館への啓発ポスターなどの配布および掲示の依頼などにより全国的な普及啓発の推進が期待できる。

(1) 普及啓発のテーマ

以下のテーマの解説板や職員による解説、その他の教育プログラムを各飼育園で行い、絶滅危惧種保全に資する普及啓発に取り組む。

＜普及啓発テーマ案＞

- ライチョウを知る（寒冷地である高山帯に適した形態・生態・生理・行動などについて）
- ライチョウの自然史（最終氷期に大陸から移り棲み、高山帯の限られた地域で生き残ってきたことについて）
- ライチョウと日本人（古来より伝説や信仰の対象として、人と関わりながら生き残ってきたことについて）
- 絶滅危惧種ライチョウの現状（現在の生息状況と保全の取組について）
- ライチョウ保全の意味（高山帯の生態系において象徴的なおかつ重要な種であり、ライチョウを保全することが、貴重な高山帯の生態を守ることにつながることについて）
- ライチョウの生息域内保全と生息域外保全（生息域内と生息域外が両輪となって保全の取組をすすめていることについて）
- 環境保全意識の醸成（参加者の環境保全に対する意識の向上や身近な取組がライチョウの保全につながっていることについて）